一休諸國物語圖繪

壹

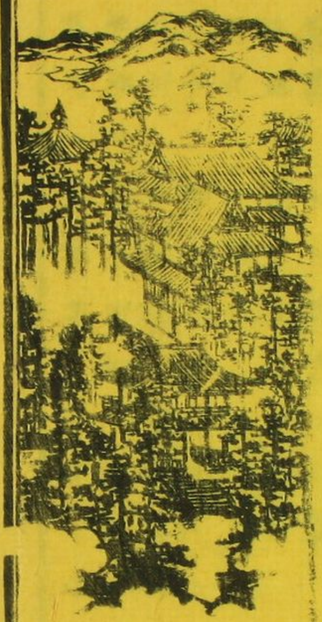
蔵山書屋

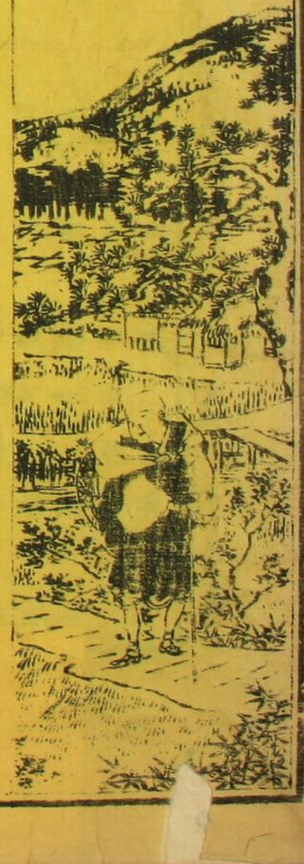
慶應乙丑補刻

伊勢物語圖會

千田止水居士輯
源基定補正

全部五冊





UEHOMMACHI ABENO DEPT STORE

五書堂合梓

九曜文庫

山居寄僧

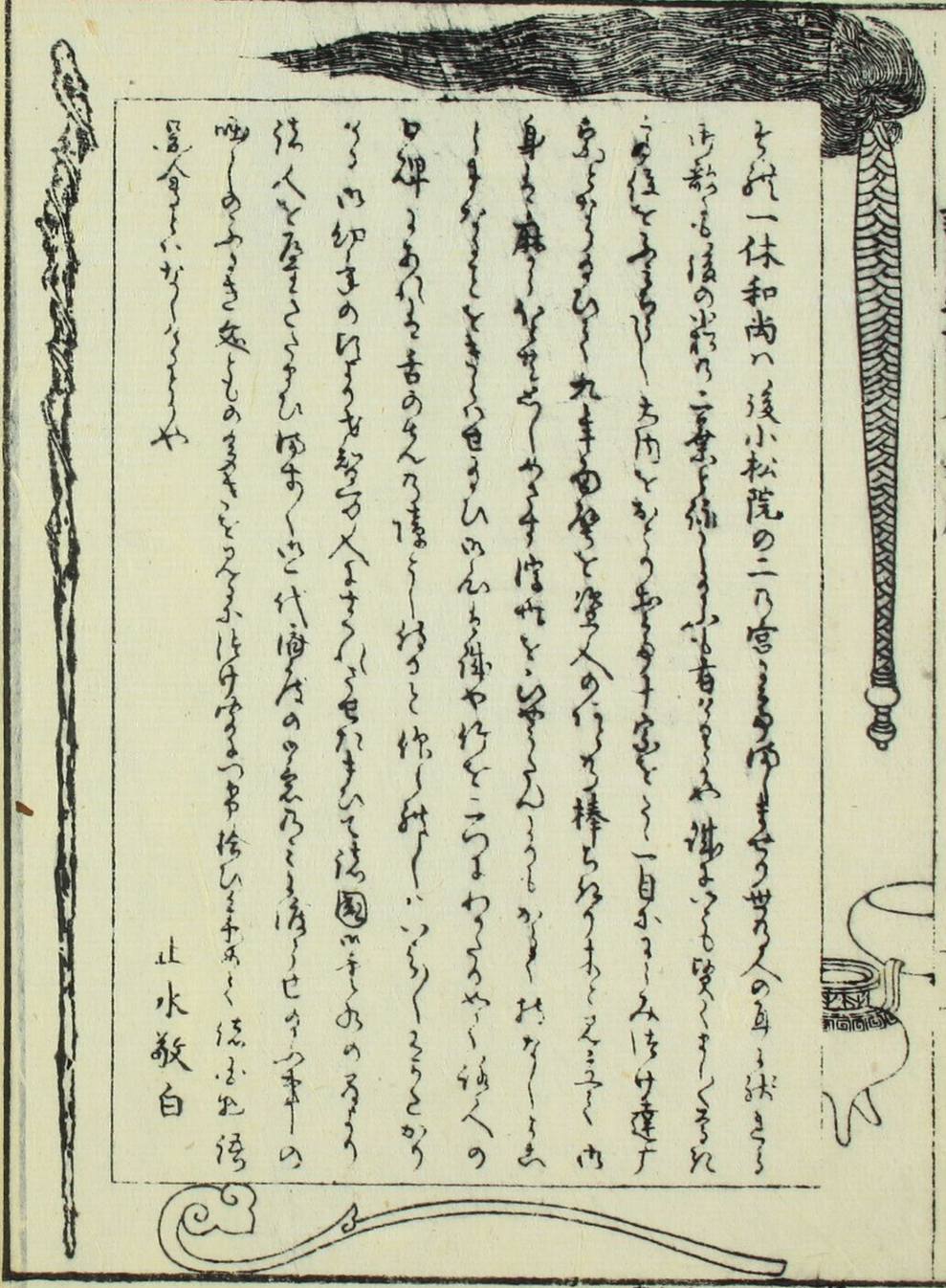
未須臨濟

聽松風

一筒徳山棒

三十年

公安王文
長松皇後



そも〳〵一休和尚の後小松院の二の宮にまします世の人の尊ぶ事ほとけの如くなり二条より俗にうら小路とよぶ所にて一日ふと見そめ給ひしより忘れがたく内へ入奉らんと思ひ給へども九重の内深く人の行かよふ棒ちらうもあとさゝず内侍の局を語らひ給へども身も賤しければ叶はぬ恋路と諦めやすらひ給ふ折ふし一首の歌を詠じ給ひしを内侍の局より吉のそんの事なれば御園のまゝの事なれば人をやるべきやうもなければ代筆の事を頼まれ給ひしかば

止水敬白

○和尚幼年より色〳〵の事を聞給ひ武人剛勇にして物の小僧をも手討にし給ふ。志ゝなど死後なりそれ地獄極楽ありやなしやと問ふ。老人ありて答へて曰く。地獄ありて死して後の大河。死出の山などの雑々を話しやうやう地獄へ入ることを知る。又極楽浄土とは生ながら十善の行ひを修して不生不滅の理を悟るべし。一休いはく。我等がやうなる不達者のい極楽へ行かれぬ。地獄へも行かれぬ。一休はいづくへ。是地獄をさふあらす。眼前の地獄悪鬼羅刹。善悪とのごとき人をいふ。この答へやう。やゝ有て月のおぼろに松風を聞きてい要なく

しかしかゝる事迄ましとあざ笑ふてぞ申ける。一休 後にて扨か
その身の我を若年をもとにかろじめられしとて。軈て一休縄を
もらひ請て帰りけり。かの肴れ首にかけさせ志め付
なんぢ是はいかにと申されしとき。汝その合点してむこふ地獄
まりではなきかと縄をときて ひく 汝たちはいかんと
おんぞ。浄土なんと云ふへきすく合点してさても小法師は
行のまき人も有まじきかおもひあるよりしに幼稚なるを
ともかくのごとく智恵ある事。わくしなる事ありとぞ
かんじられ

○

一休十一歳のとき此事なりしが。師の坊随分しきりに
名聞色の為へより餅まいてきたりしを。一休すこし
剃て。師匠のか名のりのまへ出してある師もたゞけ人ぞ。
満月の無念破関へ行施すあるとのまへに一休その志る
より智恵さへしくましませば。忠ちて返答に雲門有是

そかの関を出されける。けんすに満月をなしてかけられ
爰なし。けふの餅も満月のごとし。まん丸そなべきにかけられ
いかさま何ひとまへに。まこと小僧まて有とさへてあるに
師くら笑ひくさしも小僧さ小僧なるそ破餅をとる
とびのひかりかなの

○

一休の師僧を宗純と申せしが。剃髪を一休と名付たまひける。
或人そのゆへを一休に名付のゆへんたづねければ
ゆへやと尋ねしに。一休その志やたづね給ひしなり
一休もこゝろをあらはされ。かくのごとく字を書きやうもなし
とこう

有漏路より無漏路へかへる一休
あめふらばふれ風ふかばふけ

と詠じたまひしぞ。師そのきゝて扨もおもしろきさとりかや。
有漏無漏といふ事をさとりしぞと幼年なれば。そこく

なる拂子をとつて。衲者の前となでさまへハつや衲するとき
きたりしと。おどろきたるちうつるく衲も心得ずさわ。
一休が曰ハの行とも心得ぬところが手段なり。それ
おもんずし処が有漏路なりと作りまぬれど。彼俗衲と次
し、有漏や即時に大事をさとりなるとよろこびて。拂
須の一句まことに仏法には。無漏ハ漏風吹ずともけるに
納るのんのそ待りるぞ。さいよわづかの後の由こあるきハ。雨も
風もいとふのす。悟ずと作りまぬれぞ。拂も思ふきさの歌うふ
おそまなりし心うさがりやせしんを一ぞすそそんと中ぞれバ
またきどくなるんぞやとのうまつれ。あのりのくよあふ

うろじもうじ一休ぞときくときき
十万億土すんさきもしれ

と往りみ身ま。一休きこしめし。苦引くして尻餅付て
よろこひのあまり。ひきり例しまつくも。納りし事を。四休

居士といふ人あり。なかに山谷といふ人。その四休の心を問ひけれ
四休わらひて云く

粗茶淡飯飽即休　補破遮寒暖即休
三平二満過即休　不貪不妬老即休

と申されけるぞ。山谷がいふ。是安楽の法なり。さりとハそれにハ
不伐の家なりとあるをとあらハ極楽のまかりと楽し
くあしく候うく。四休の心を問ひ。これにはらうらひ
ふしこころうや一そら

富貴何時潤髑髏　守錢奴与抱官囚
太醫診得人間病　安楽延年万事休

とありしこれ一休の心をよろこひ。らうまやの云よむ
来る事いたしなまへり。彼人々中々やう一休の二字をとらけて
四休の四字を改めて。拂を幸と候ひ。古来半幸
なりとよろこひけるが。かの四休の三平二満といつぐ

やゝんとやけまどふ。もと分のぬし人ども。今点まわりぬんよふくさとふんむうといつぐる。いやさふあるをもとぐもセのことなうとのつまへぐ。扨もめづらしきことるか。海よこ平いあの如と梟二滴ちあしもと順よ。さてもありうき事ぞさのなぐ。女じもふかセ女ぐるぶ。一休うねとはうかへ

とゝろしくなりぐる

和尚幼稚をとゝろえよう。常の物なりぐるとやゝ。此の傍と書雲和尚とやぐる。あひるる呂物つぐ。常ふきぐうぐ此の場ふまなぐ

ぐりてゝも。一休の幾例なるをと蛇ぐ。打根殺ぐ云ぐ罰そなぐぐり。或とゝろの呂舟上技術をあぐ来つとぐるとゝろと一休ハかえてらぐ。四へとゝろと入ぐさ

ち紙

一休寺の内へかえのたぐひぐぐきんぼうのむ

へぐきゝろぐ勿よかぐぐ

と云ぐぐ雲ぐう。かの呂舟ぐぐ。此のたぐひぐちぐぐ

あるうなぐぐべ。此寺のある殺ぐぐ

ぐまひぐぐぐぐぐ夜を宣ぐぐぐ

ち殺のぐちをぐぐぐやさむ。此のぐぐまをきぐまをけるわぐ

みをもぐけらまぐる。そのぐちぐ

まて一休を此供ぐぐ。

ぐ。入口の門乃まへ掛ある

札とかゝまておく書ぐぐぐ

ひぐぐをわぐぐをかぐくきんぜのなり

ともち分ぐる。表奥和尚舟のぎぶんぐぐて一休をめぐく

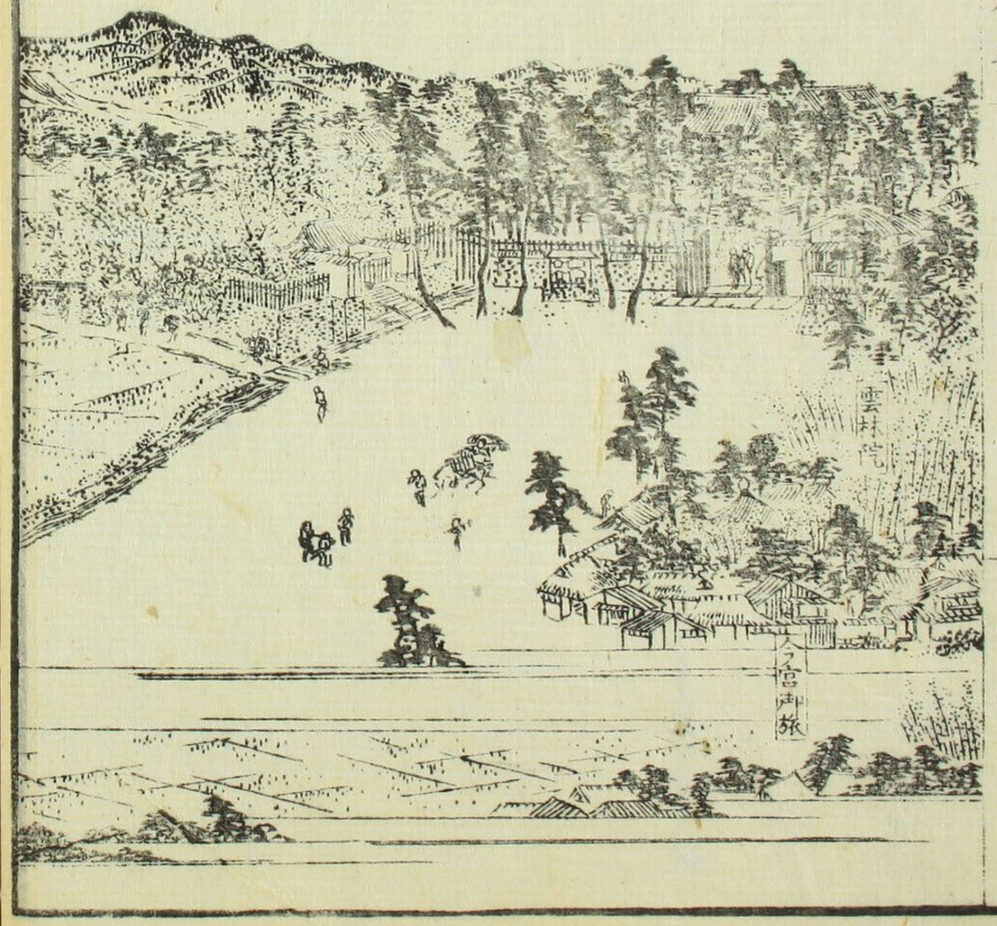
かの人乃ぐぐへ此出あるふ掛の札をの後ぐぐ。ひぐぐつぐぐ

四へ入ぐぐぐぐ。一休いぐぐ有ぐまぐぐやひぐぐつぐぐを

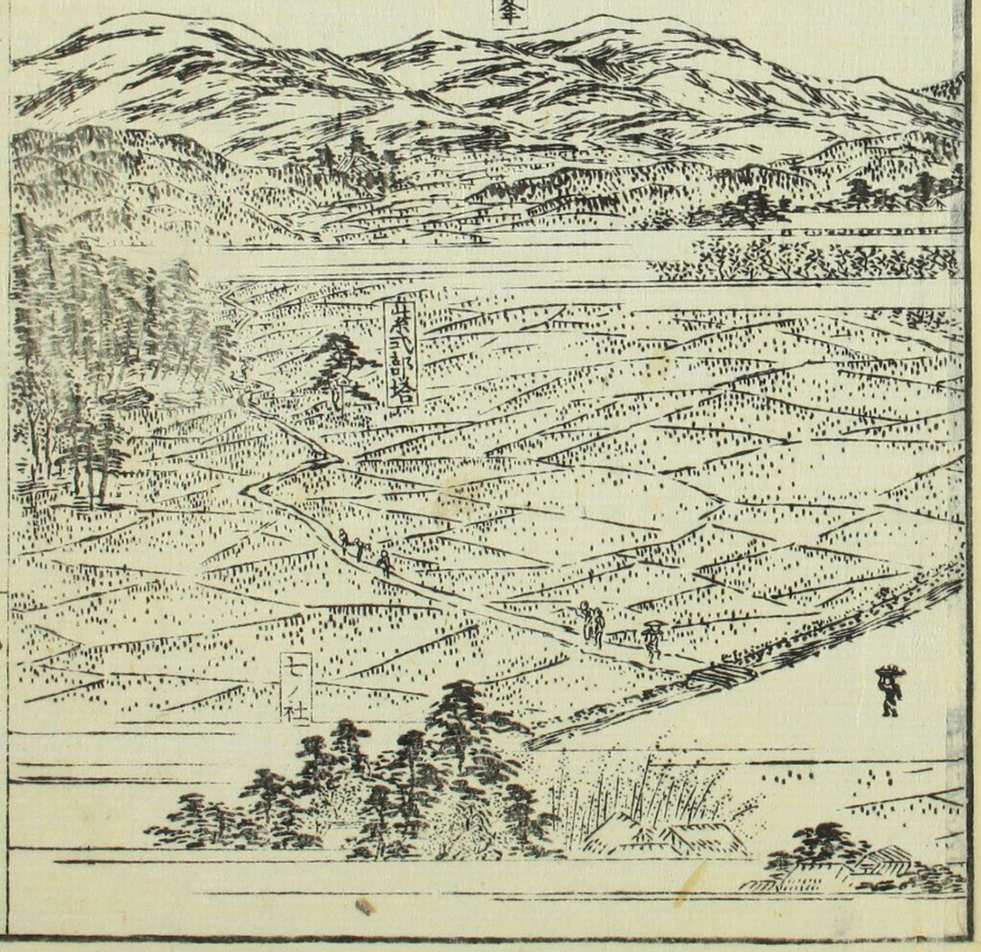
とかゝまて仕ぐまぐぐん中をの後あまぐぐ。ち分をぬう

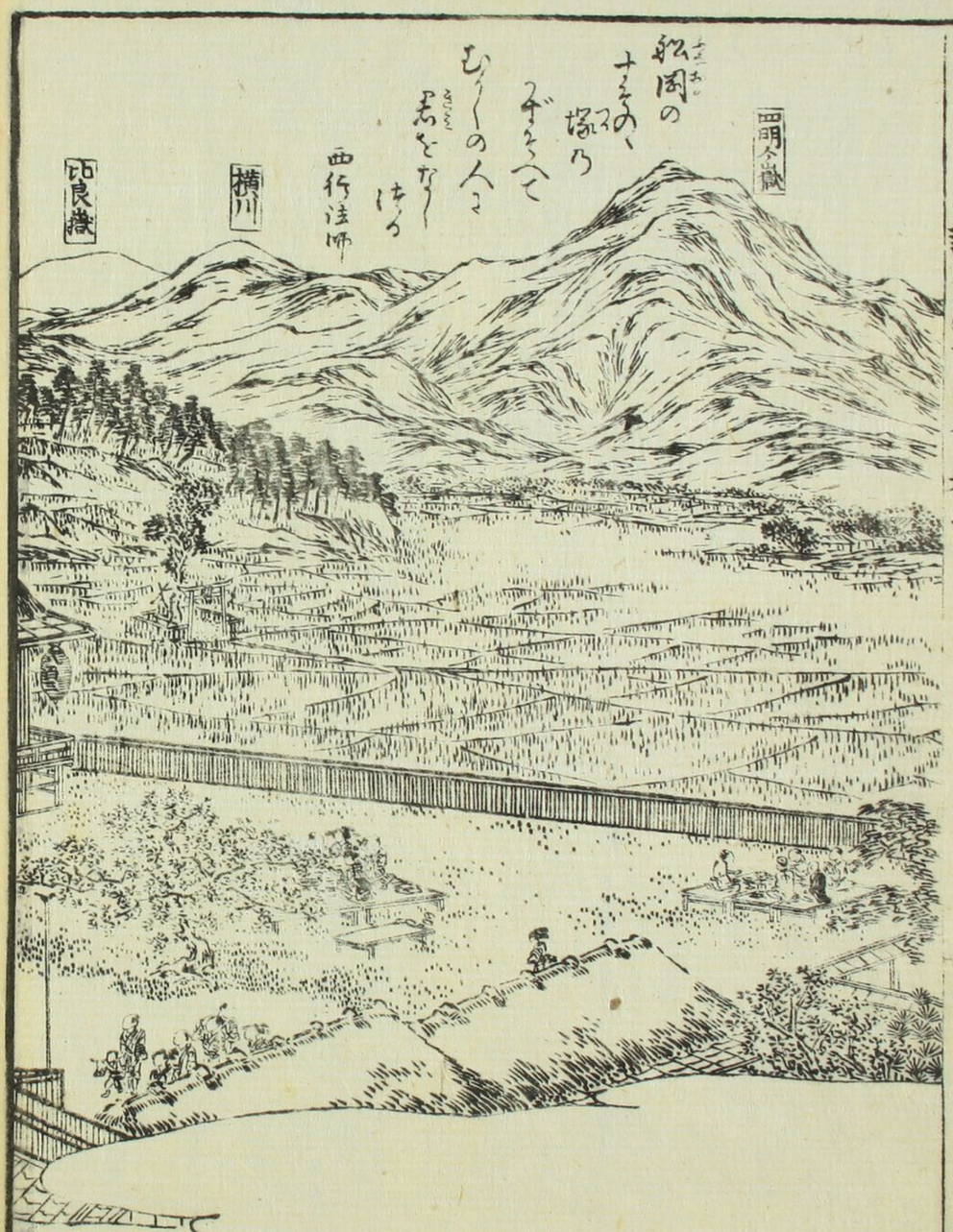
大徳寺境内
勅門前風景

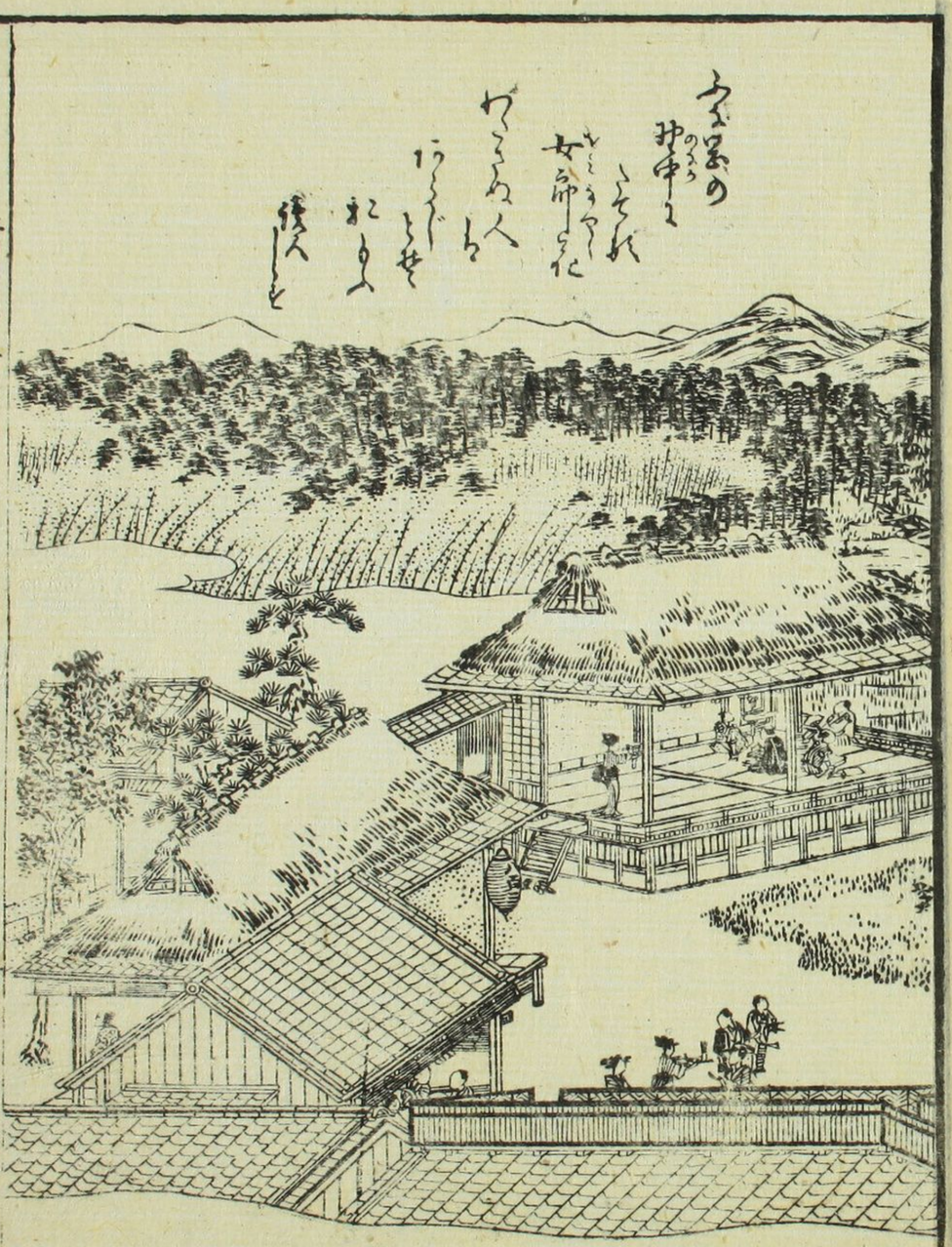
肥後
ひごさきの
さとれ水を
ふんわさせる
ほりおこしの
ふるまふ
うり



一休十二歳のときこの
小溝にて中ぬき大根をあひ
喰ひ給ひ寺の門前を
寺ふ止宿前と
なふ小僧大根
をあらふといへ一休
ふ中比紀
なふ家をこそ小僧と
いひ小根とえく大根と
いふよらひ
かくのごとく紙
一旬のうちにもなくなり
まきこのふるまひを
寛ケさよさてみけり
しとそ




四明今蔵
横川
西行法師
古良蔵


女郎花

諸國物語圖會卷一

和尚ふつをうくんでまへに小瓶を一つおいて入う。一休さまあつめ体そのまゝくゑまをあつめてさて今日のお志も。こゝ七日つゞいてふんしんしてゐてくれよ。なをもつてお前をたつとうんとさすること布施でまをとり出しこゝろをいれかへて居るやうにしてふ。一休きこもあつぶんさうく投げおふおく納そうにしてぢ。おく山伏ふ。きまします。九人ともおゝきにへつらふ。ふくと釈修しこかんく

和尚さうの通りつゞいてふ。ひとり女のそばへよりてふ。

ありがたい人くをうんこそもあの僧は狂気の出もの乃多くの女のそばうろうろするをうんこ。こゝ女ふ拝てゐるのをいふ。さもなくかゝる事はやくんのつまでぢ。狂気ふるの。我もくになをとらひ。やうて長生そをしらずふるの女のそばへよるの愚痴の僧やんぢまりくい。仏をうんこいふおくこと日ありけくの事一つもおうびうわぢ釈のひまそくるまよ

女どもは法のおくらうとゝいぞ笑

おやうと達磨も九年生

といひまそくもおもひうまふ。いふなる坊主やうんをふぎなまふ志ふ人ありくなまそを一休なうとひくく

人あくことをおそれ、我儘なるこゝろでもかやうのをいふぞこんあり
ともおつゞけ給はやる。其の中の坊をなくが女の紙をとゝゝゝん
おんらうみま給ふりく、同もくなくそひくやうんくれ給
なくて通りうつゝて有ごゝゝ。実も女の名門より。きん人
ゝ程も出ようい結宗のふのゝ侍らんくそうる
人ゝゝもとかんじゝゝ。りやうなるこゝろ
演給ふゝゝいたゝくへいけゝゝゝこと
通ふ事ばのゐ給ゝゝゝ。侍んをゐゝゝ
ものゝまうおよ。ゐ給ゝゝゝ。次よ悪ゐなんゝもまゝゝう
が。大ゐゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
係はふ係ん人ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゐ人のゝい。ゐ給ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

理ふ明けるゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
況ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
未ゐる経係ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
なゞゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝて住ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
て作ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

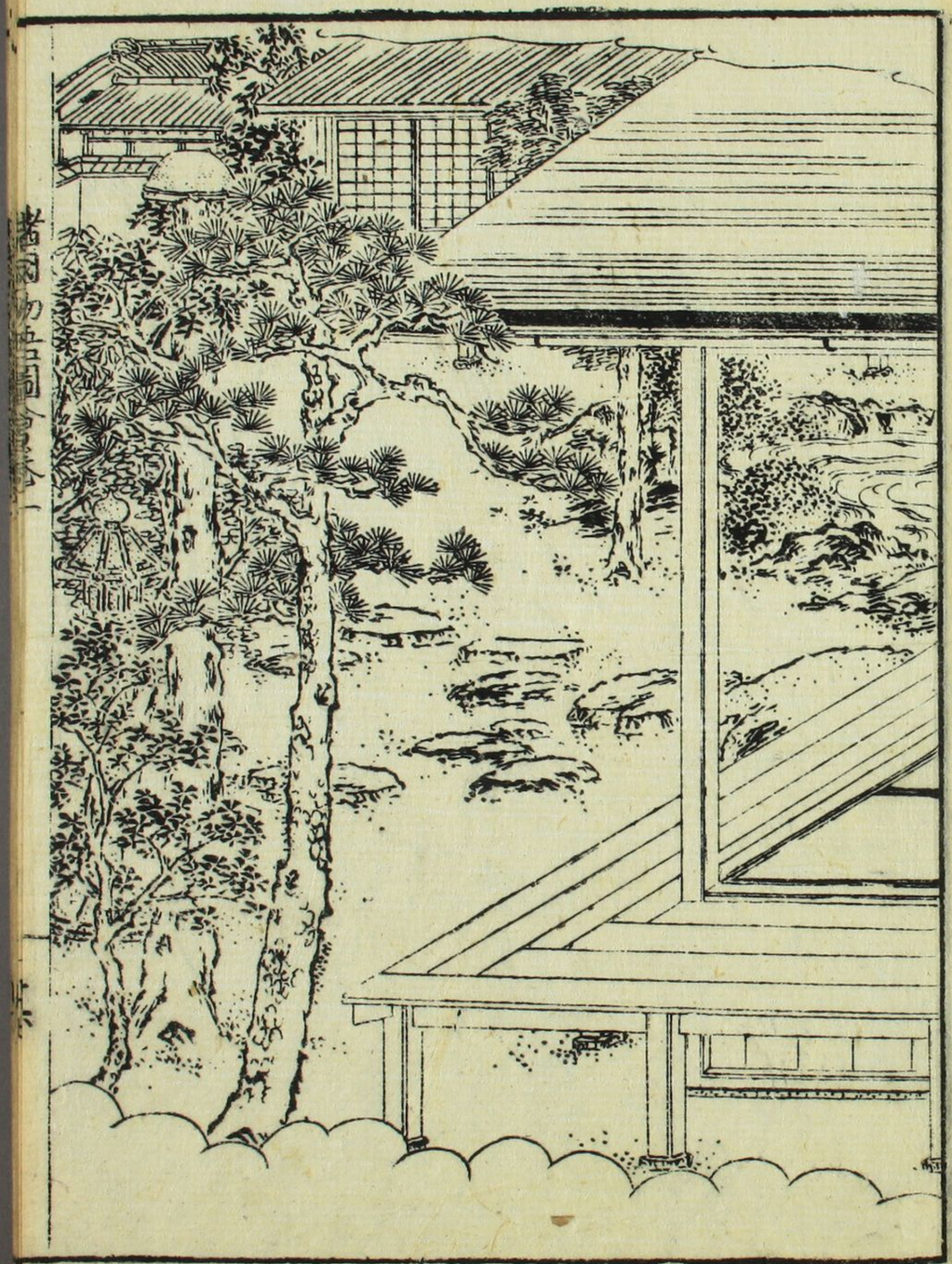
あと作す。中ごろも大坂堀
と後せるけれが、利三郎の
のふとうてのおうり
うも。紹鴎うとうおうう
稽るとうつうのかんだ。仏像論後ときく。京東風
なり。うて道俗もてうら
うれ。業花のうとうとうう
準いうぶひもなる。修論
のうそごうう。和もうくありい
うまひく。祖ぶうくうまう
あうぶなもはうたとうう
こまぶ位のもいうう

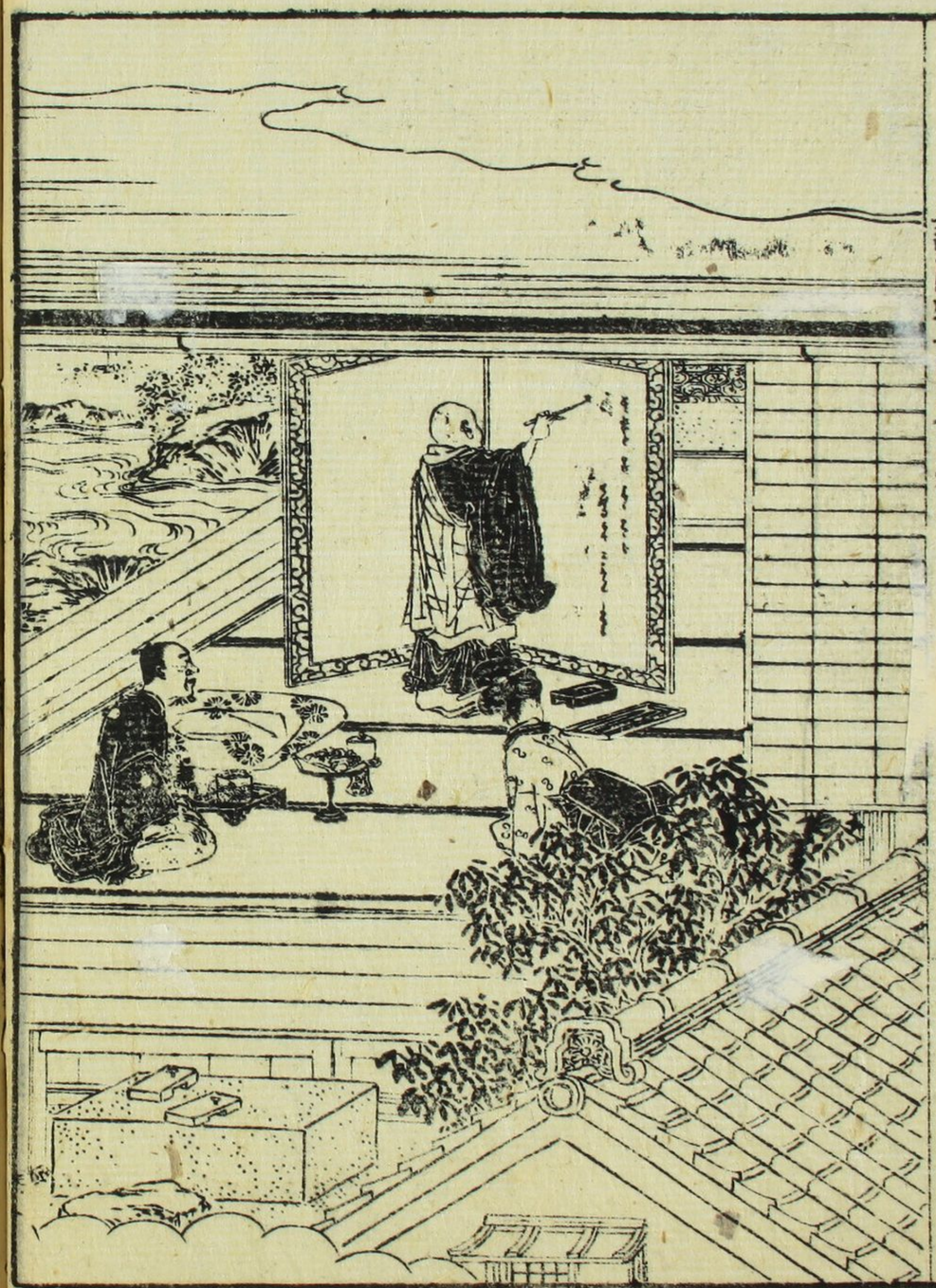
○
下立妻堀川通と通ごとの一体と称
ふも入ごろ川うう一緒
炬うへうそれが。さんめる
やもすれも姑とうう
ぶうめうう。うひて。親のあおいうう
ふおしい。和あうもうう

関係うとうそうせうへう。よく
もさ娘の法そのうめ
ん。和尚もきひ。
関糸うその準なうふ。
うう。ならもうもひうう
うへん不肖うその準なうう
なやうとう。うる源く
くまで。うふ結なう
やう。け病うん娘このきもと着へうう。忽ち
和あうへうう。母うう
うう。妻うわうう。その方い
姑とうう老病のうう
ひんうきそくひう。お命そのう嫁。こと
うううれ。うるうをう着く姑と命め

ふさの折ちくしくおもふろなる地かのものの
和人跡うそ。その好なさまけひりくへめる事ころころ。
まてふ歩代うさのるもうれる。生侍へ和の人おかく
あつまりうかる老る人のつるとうかこと。尾こうそ。いろさ
そのこんなるとうこと。山城尾と右たうよりへうこと。女の
おそろしきをうきうろことおそろしく。うく人汁ぬさそれて
跳をそうこうものんとうこと。尾のうこきうる。ろのの
ぬくうこ奥へうこ。すこうも。ろへ出ぶりうり
かくのとく怪しうこ。はるよりもりくくめうり
こんとうこ。はるくく姑うあうしくらひなうり。
姑のろへ入まうきぬ衣とすり。料ろへうまうきぬこと
のきもとぬすこくらしくうくかくのとくけへ
くうまうき地の死入くうる事ふ衣なうかうる。

ちくうよそく。おそろしく。
夫婦ともふをとうこと
うろろまうきうる。和尚さまうそまうけばろあうこ
き松屋風をよりへ
中ろれうそん。
一紙やうき事なうとも
ろ一人竟二口もや
姑夫唯ものやく
夫男ふうのもの
なうこうこうこと
もの中れうきのうこ
とかやうこうこと





○一休人を教ゆるの法 和尚の和尚のまた和尚の御弟子に
ましける時八治郎左衛門と云人をもろもろふるまひ
うつくしき又教ゆるなどいふ事なし。和尚仰ける
生れつきの悪の根本なり。たとしまるおのおのそれ
のうち悪事をもろもろ事あるべし。はじめ
志ざし男ころ人やうやうと
や。みちびくもおろかなのまゝにおもむく教
事ありがたきことなり。利口ぶりなどのあるものは
ん。我もまさるとおごりたかぶりて悔
や和尚舌もひく人をもちひ
ころうおのずからそんやと仰ける
ぐんにんよりて仰信

よの常なくをはゝく仇所へ月半ととのつて行ことあれ
ど。指てさしまでもあるまじ。分ちてもあるべし。
扨もおのぞゝ歩とて今年ばかりの身にあらず。あるときはみ〳〵ん
ざん幸一あり〳〵。今更ふるまひをかざり。一体和尚を請じ。我死の後の
ふるまひをかざり。今更ふるまひをかざり。一体和尚を請じ。我死の後の
生前の身をちゞめとすべきたぐひの事をかき記
しものあるべし。今いちつゝ記すものゝ如し。
天下のものゝ〳〵ゝ。扨ちゞめとすべきたぐひの事をかき記
宝となる墨ちゞめとすべきたぐひの事をかき記
書をあつめて。天道の如しとも。儒
奥を加へる。山をるゝ〳〵ゝ。樹あるとも
てそゝ〳〵す。家宝ちゞめとすべきたぐひの事をかき記
とも肥ゝゝる人のゝゝ。痩細ゝゝ扨ひゝゝもかゝゝ
まだあゝを張ゝゝせ細ゝゝ。ちゞめとすべきたぐひの事をかき記

ちゞめとすべきたぐひの事をかき記
うべし。又疫ほゝゝゝ病死ます〳〵命あや
ゝをかゝまし。犯ゝゝ人行ゝゝゝ扨ゝ
森神居のびゝせゞ水乳血
ゝげゝ斗の墨ゝゝ
ゝ後覚悟の鬼男ゝ
なゞ都ゝせぞふあゝゝ
せ。着婆ゝんゞやくゞ再来
いゝゝその紙ゝゝん。ゝ天の黒白脊の也遍も又
かゝのゞ。ゝふりゝ。ゝ知ゝ寸ゝゝ利
ゝの人あり。叶男ゝゝも我ゝゝ
らもゝゝゝ。悔ゝゝむ事せつなりゞゝむ〇ん
ふほゝゝゝ忌ゝゝ我死ゝゝもゝゝ
みともみあゝゝ脊のゝゝゝ

ともしくに奴あり。そのかたちはおもむきし其脊のごとき
女ども年ごろに見脊二つ三人余にて。手嬰の悪女ありといふ。
さまをむつてより。被り世をしのがるに。なく。此女懐姙
して九月ともとゑてくらく。虚月ひとりとし。まうけのうぶ紅
うげくつんをまちて嫁なりけり。つれあひ男子にてあまりしと和人
寝に女なり。捨つさりとも。かくて此女は
其乙に男とまじりけんしとかせぐ。ふくも衣まし
はしけさ男に女子をそだてり女人まそてあり。彼男あつて嫁立や
美人やといふかかさしまても甲斐もなく。はづさうの
捨身のとどかけしも流石さりもなくすまし無情にもあるとて
其身の上の志さらば。猶まも母親まの悪く思ひ脊らるく
泉路にしけはらあへふつむさぶらんずまへ一つの儀よい鼻
の月んいりずまりて細くらひさき迷ぬなどのめまさし。古夫人
むさつの女なり。むことを嫁入なしたれ物をもむそあつかひ

ら有さまなり。御年もかやうの年を歩うくに涌るゝ
悔らうも年あるじとて葉まで花を咲せく流るゝ
こそ帰らるゝ

それ道人どもをのつきをゆそうしゃとも。縁とて縁ハこの字あり
因や其ありて妻子一さい衆生の父母にて大慈大悲あまねくおもき
実々に備ときなし。釈の身にそつめく。彼岸しのぶるべき仏の
力さし衆生もおそらく悪をやめ善を勝つ。念もいゝてこころつなり。およそ

ありけるとぞ。又まぢかのころもちうみんといへる人の物がたりしける。

○さる人一妹の美麗くうるはしきを。紂王なりしものたくひそかに心をかけ。ひそかに人をつかはして。いかにもして我ものにせんとおもひけるが。妹はかねて紂王の悪逆なるをきゝおよびて。なびくべきやうもなく。ひたすらに阿弥陀仏を念じ奉りて。一心不乱に往生をねがひけるが。ある夜の夢に。天道より仰ありとて。天人あまくだりて。汝が念仏の功力によりて。来迎引接すべきなれども。汝が兄の罪ふかきによりて。汝をも地獄におとすべきなり。汝が兄をすゝめて。悪心をやめさせよ。さもなくば。汝が兄も地獄におとすべしとつげ給ふと見て。夢さめぬ。

○さる人一妹の美麗くうるはしきを。紂王なりしものたくひそかに心をかけ。ひそかに人をつかはして。いかにもして我ものにせんとおもひけるが。妹はかねて紂王の悪逆なるをきゝおよびて。なびくべきやうもなく。ひたすらに阿弥陀仏を念じ奉りて。一心不乱に往生をねがひけるが。ある夜の夢に。天道より仰ありとて。天人あまくだりて。汝が念仏の功力によりて。来迎引接すべきなれども。汝が兄の罪ふかきによりて。汝をも地獄におとすべきなり。汝が兄をすゝめて。悪心をやめさせよ。さもなくば。汝が兄も地獄におとすべしとつげ給ふと見て。夢さめぬ。

虎の歌

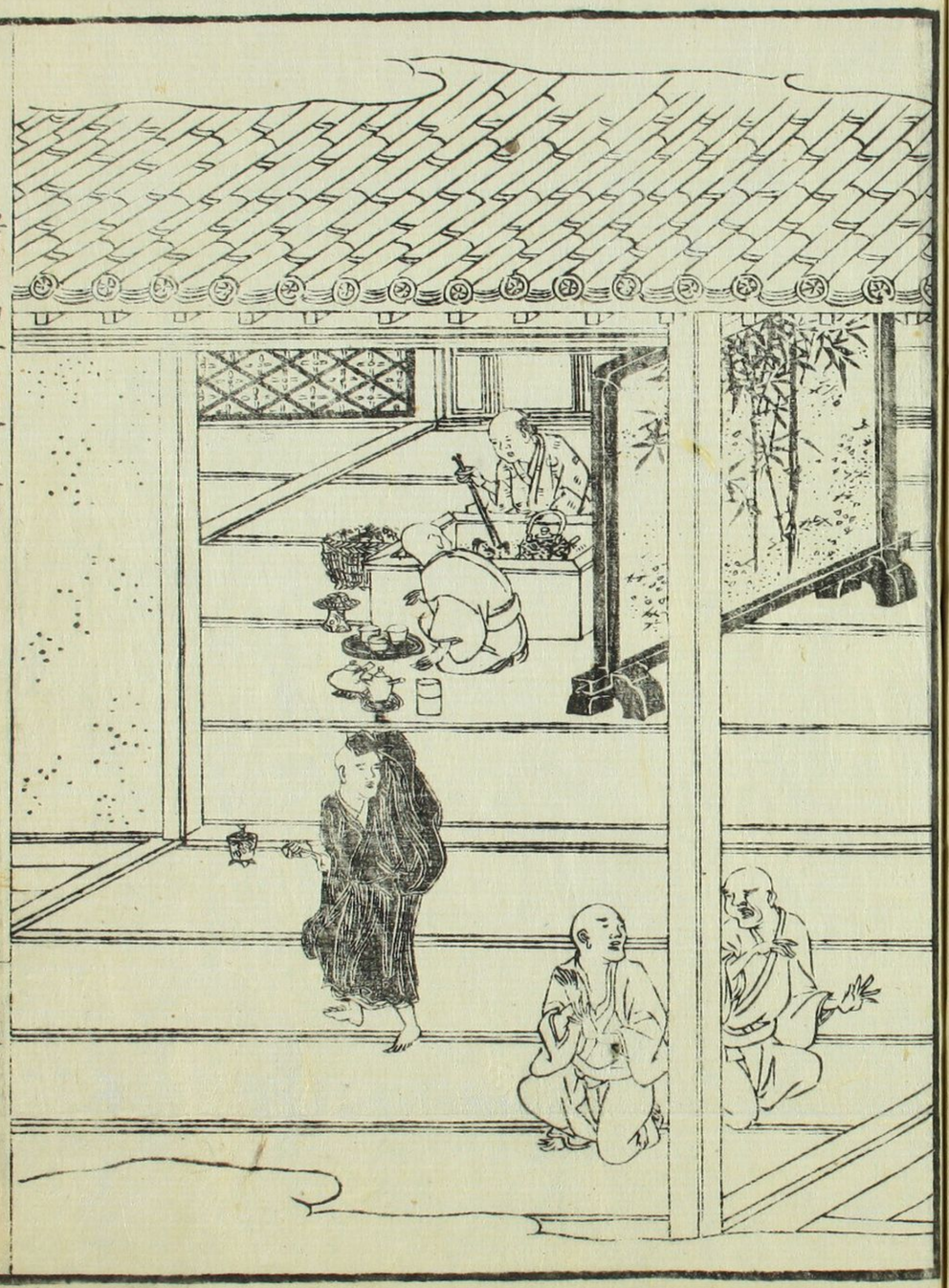
かりそめの
いくよも
きつねめが
己うゑと
ゆゝことそ
なき

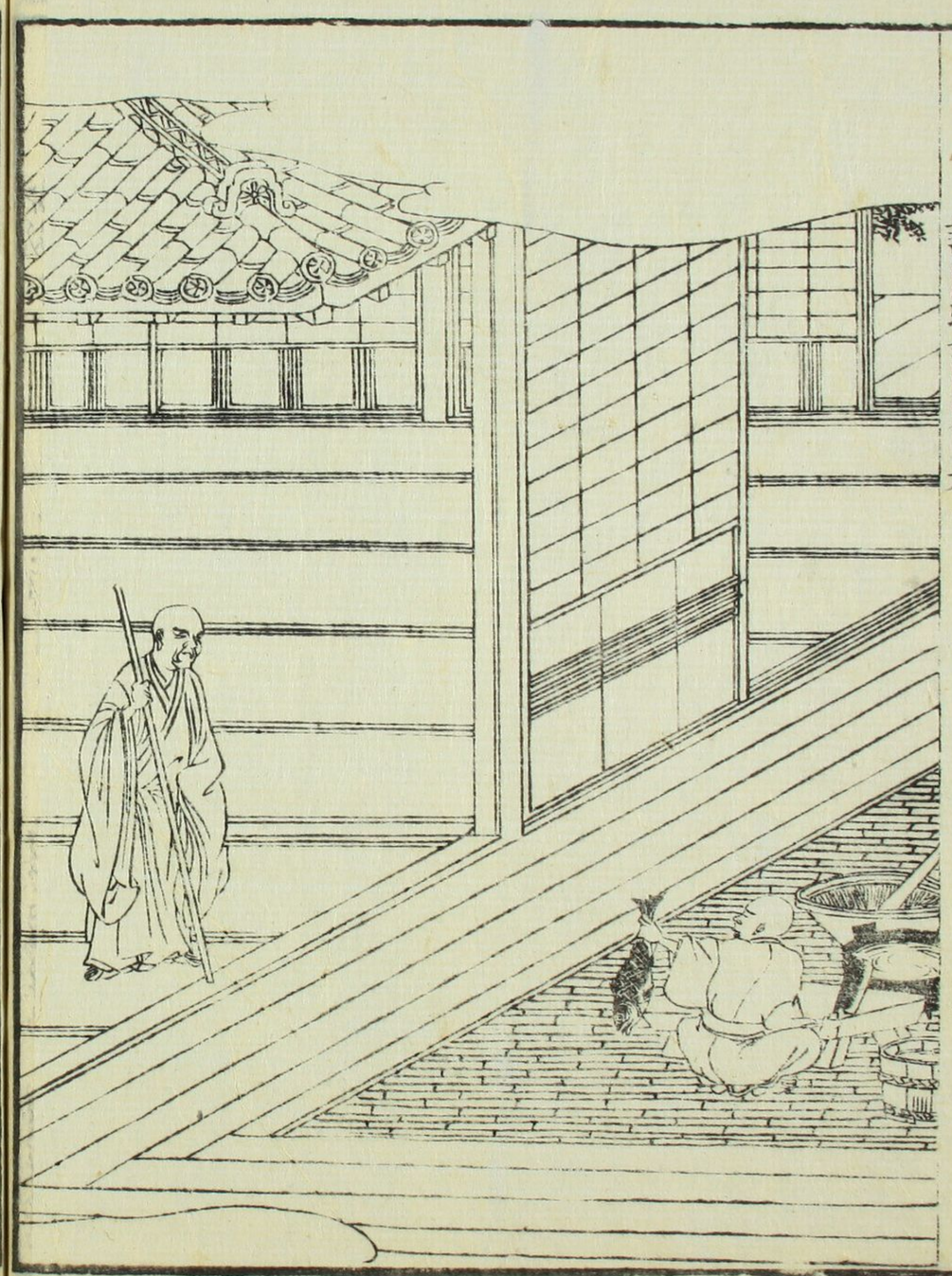
○爰に伊勢小作といへる大すりきりのわかしきとのありし時
しも極月廿七八日ころの時の事なりしが借銭こらひ
つかまつりせんかたなく家ことごとくけまくらさいかくしてうかふ。
我も人もとめんくも用あらん折からなれど我用に立べし
とおもふものなし。去りながら爰に粟田口辺にて老八とて富さ
る人の町人あり。かまど多くへ身切りのつぐやとおりひ粟田
口へといそぎゆく。此老八と申すもの、いかなる御堂のつと
めきびしや朝夕の飲食とては黒米飯ころしかりまく
くらひとの着なり。かまふことなきひとがゆくもんのごとく法
まもるものなれば。我身のうちへもしこゝ朝夕の合点
ふりしと。ときに至てる一度もかんきんする程のものなる
由なりましてや。兵糧ないりつく代まで好かまくと用に立
ぬる事おもひもよらず。うかく気合中るに、是ぞ悲
なくして帰るとて

たのみとせしなりゆゑに此はもはや老八が
持ちたるものぞ我身ぞさんむ
とよみすてゝそれよりゆきさる人の申しけるは一休和尚。
まことなげき給ふべきやうに和尚を志ひふくきりし
由を語りけるにそれならん事はよもあらじと尚ゆくゆく
らまつり。誠に其身のよろしきとせしが新然の用事と
なくしつゝ事ありまへば其身の事は和尚。我
まても念仏に往生きまくめでたけあひのかの事あるまじ。
とかくは申せば此君がめでたく法然にもやぞ和尚へまゐる
おもふし和尚出会のうへ先我身のうれし二ツ三ツ仕つる
ようさとききとらん気合中なるに和尚さる。さま人ある旧百
貧病の二まわりに貧苦なでつきて病もなししたかんもなき
とうらうめづらしからぬ借も用しそまつしかの年月なり病みぬ
かりしをふと此れまでありおもしろうかひさる天下の様にべ

ひ却ひい我等が療治よくかゝるひでく。かやうの病いまだ
一生出ることなくして、やまひの名をもよべる者のうんと
もざらふ物ぞかし。多くはいこぢんひの積気とつゝぢひなりいろ〳〵
しくかゞく。妙薬今根本をとりひ〳〵のこうろく。卯時
ふ治すべくとをく〳〵ゆよあづろうなひと。なくくとをくくと焼
〳〵やせる。和尚きくうひこぢんひくく病い年よ
りなでおろう病なり。まづ南月今ごろ。林ち七月中旬
なるもをまゝそとくろうひやなろうさもあく〳〵急得
まくく〳〵おあくせんして。奥くへてまいる和
一つくれ出〳〵。きくれ養命補丸とうろうけり〳〵再度
のくとをいまくく。なろう。まく〳〵なく
さ国果の名印用おの名和をく縁〳〵まよ

士峰とうろうをまくく〳〵待ち。そまをふまくく〳〵後日成
おく〳〵国果のろ理と数うろうものまい国果
うものがうろうとなくく。ばく国池よ茅ぶ小
角豆の外うを。枝葉のまぶうう虫のう
つてうんおくもあり。やせうるいうなる木根ありやろせうく
ぎなどのうひがあるそれくとうろうあなうろうそのしあく
うれのまくく。種いはくく大小そくんやろ。
あるくれうやう。天化の雨ふなうろうのは。そのまう後生しぐひて
ありやう。天化の雨ふなうろうのは。そのまう後生しぐひて
ぐく。ふをれくのふくうろうふ
ようおまの業国よろくくしてみ練こなる
なるお母の文大仮わ合こうして風く仮名の勿と
も和〳〵。そ如国果を揃ずうろうの悪情うるの水のくらふ
ふをくく妙法すう事まれ。復の水後世
とうぐさ。かうもうろうく多化らんこよれ





やうんなまくに人ろんふせとうけあひがたき紀伊の国
さ入ろろろ。江戸屋敷をふろろとろろろろろあて。ここや
まで。てさろろむろろも伝ぜず紀伊の一勢衆をろろろ。あとむ
うくくくてまろろ。ろろ処ろろろ来ーろろろも。
く勢ろろ来ろろひくろろ。紀伊国
やろろもろろのろふ名作ーはろひいはせめーせ
の名園をまいろろなろ
勢の着ろろべーと本邸のちひとろろへ江戸屋敷のろろ
多分令下となみろろろふろろろ。まろろまくーや後ー
ろろ半ー約まとも。ろろ
はは次のろろかろろいはろろん清後ーろろせまーや

○

和歌のまごふ作ろろくおろろもろろろろ
らひなろろて石のろろろ。ろろ夜ろむのろろなろい岬の作いかろろ
ざみとあろろめろろろろろろろろろろろろろろろ
のあろろまおろろろろろろろろろろろろろろろ。一体ろろろろろ
なまろろろれりのろろくろろろろろろろろろろろろろろ
ろみとまおろいろろろろろろろろろろろろろろろろろ

やろろる。岬の作ろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
あろろろ。なまろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
らまろくれい。一体屑をひろろろろろろろろろろろろろろろ
いはん人ろろ処ろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろまろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
つひておろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろんろみろろいろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ハなけまろろ。我名いろろろろろろろろろろろろろろろ
ろろ年ろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろれろまろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろ実ろんろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

ようのべてろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
西え東桔梗のろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ
ろあろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

喝。とのまひく。ひくゝものはおりうる。一体はくぐゝ
ゆゝく又眉をひそめ〳〵出ぬんして夜の明るをまつ。
いそぎ魚の初へくゝもどる。まもなく大ゝく出ゝうなる鯉弐
一疋買もとりく。味噌汁をおし〳〵へ。かの鯉とひし
みぢり。なべとみおつとのべくゝ。細骨ちりおら汁出ぬ。
せゝをくゝ赤へ。此の湯ぐらいもんじて。こゝまでかゝる
かぶるなり。此後もあめ〳〵ふりつゞけ。小俗乃家とのひし
らくおを宮せ舎ごん業 納るもの乃半なるこゝ。
うよ。一体をさらず 納る。去
ぬ年ふおとらぬ。此の湯もあまれをそ。大ふわくひそれハ
いつなる引事ぞや。りもさうぞいのぶ
まゝ〳〵そ。かの此家のこ指とゝ
とせめをくる。一体まそ〳〵

そたふ鯉の細ぐびひんまぎりあふいなゝみをもやふう
まんくいゝく
汝ん衆なま来のめ〳〵此
ん中まおそうんよりもゝ
ゝく鯉の細ぐびひもなまぐ
ぎうゝ吟く。ゝゝそ此
そもゝさ引事ぞでまぐ
らぶ引事そへ。ゝぐけハ此果をわて
鯉もこをとうゝて此果をわて業とめぐ〳〵汝か
人や獲傷なるぞや小傷よりもとうゝとそて
音をふひくのうひゝるに。こゝ年うなる嵐と今年ゝ
の痛ぐれんかぶりをや。そ
も熱ぐゝまひるが東のぐゝ
のまふなの活祖師まそ。一体

をうへより仗のうをする所までそも和尚の德とくやうひとくやれすの事。後くん人うそへまことにはさびうる

○一條和尚ゟ蛸が此好物そ貳日つゞふ蛸を賞つゝつゝれくるふ。おくり〳〵席よきくなりくる。紙つゝひのうへにおそろ〳〵と年よりのる所おそろ〳〵とひくびるいつそぐとなくそでの

ことのつゝ

ゝゝゝゝ多へ。蛸にはそのうまそ。一條よりくびくぴゝとも食をもぐんの事なり。此の碩

なるていとて

千ゟ紀有蛸ゟ多。勅無地頭ゟ拜二所ゟ

佐只一味天然ゟ化禁戒王光天迦

やをひなまいすみくるぐ。史長ゟ奏ゟせんうのやうやゝ長ゟ

地頭をうみくひくまひ。さる權勢ゟ多くゝ

なでまゐりくるが。なまりふくるゝくるぐ。くるゝ蛸なり。只邪ゟ品ゟ

中くるば。一條和尚ゟ佛のやうふもひゝよ。蛸とまゐりくるか。さくくまゝそ妨や。まゝ

ぐ。一條はくゝもさぐそ。ゝとよ我ゟ蛸をくび祿ぐも

いう出まそ出ん。やくゝ引つまそ百遍こりく。善事は終の

悪緣をえせく。あまえんくまへくぐをくひゝそ

かりまでも。ゐうこうるを出まへ

いう出まそ制〳〵めく。まゝ

さふせんくるまと作りまとべ。皆人ととべとうく。
さそも狂作なるかな。
○
扨一休和尚も生佛うそうそもその魚くらまうえのごとくまうこと。浩叟
山寺をもつ作て武人ありうくうまとべ。一休
をうくふるれとおそあげられ
おどくむる事なりの出給そまふる

古美の天下老れ者一休大浮世

そ書まふる。浩叟の端人をとうく。うそう継。かくう
人くひまでかすそひふ。扨もうそう奇なし

ふ。ぶつうもつてさふいもぎそ
作ふ思出出くんせやうんとそ。
栗ふなりそひまそ狂作あまとそ

内へ入る人上下五万人ともなく。そもそもおびたゝしき物
と思ひをとゝめて。ゆくりなうかゝる中。ふんあるものゝいひけるは。只
今ここまでもりくる思ひもなくまくなり。あれ誰ぞ。ふねにまきくなし
うか誰ふねにまきくなしうかと。いくたんともなくさゝめきけるうち。人の
中よりいくたんともなくさゝめきけるうち。人の
通しをとゝろかしてとをる。その形を見れば。年紀廿ばかりの女
房。髪はおどろ〳〵しくみだれ。顔色青ざめ。目はおちくぼみ。
まなこするどく。口びるしろく。歯ぐろくそめ。身には白き帷子
ばかりを着て。腰より下は赤き物をまとひ。左の手に一尺ばかりの
鏡をもち。右の手に火をともしたる松明をさかさまにもち。
髪をふりみだし。はだしにて。ひたはしりにはしりとをる。
あまりのふしぎさに。人〳〵あとをしたひ行くに。彼女房。
川ばたにいたりて。鏡をなげすて。松明を川へなげ入れ。
我身も川へ入らんとするを。人〳〵とゞめて。いかなる事ぞと
問ふに。女房なみだをながし。我夫は。此川上に住む。
漁師なりしが。我をあまりにうとみ。今夜我をころさんと
せしを。我ちからおよばず。命からがら逃げ出でたり。
我夫ながらも。あまりにうらめしければ。此川へ身をなげ
て。死して夫をうらみんと思ふなり。とゞめ給ふな。
とて。又川へ入らんとするを。人〳〵とゞめて。
さてもおそろしきことかな。此女房の夫は。
いかなる者ぞと。尋ぬるに。国果の二てまと
いふ。漁師なりと。いひ果てゝ。後は
のふかうもなく。泣しづみけるこそ。なよ〳〵
しくもあはれなり。国果とは。此川上
にて。わづかの
ものゝ名なり。我人のうらみ。
もどんの鬼がなるとぞ
とをれ〳〵。

亡の盗人ありと聞と。矛と刀とを入ると。
ゆく〳〵ものをとゞめまどふ。人のさわぐ
事かぎりなし。ある人のいはく。此
死をにくむ。まことをもとめぬ女なり。
其むかしの事ども。
一通なる縁文も。利丹陽のつけの
ものゝ名もしや。
えてとゞめ。
秋の名賊。
盗人が
ぐるもつゞきふりつゞき。八十八
縄かけとゝいふ。

○或人和尚へまゐる。おふ〳〵和尚さまおくうて淺ましき男やう。和尚さまそも幸ひ〳〵。今日うめごろ仕まつり候ほどに和尚さまも御ゆるりとおこしなされ候へ。和尚さまも御ゆるりとおこしなされ候へ。

中ふ淸希仕りそんと。なりまし〳〵の御ふるまひ。先きりなく〳〵と給仕をいたしそうらへば。

ふぢの山よ　あさ日のごけ　御ぜんの　ひえいざん　きぐ〳〵人の宝船　東寺の塔　天狗のそら　大竹や　松　ほふねんのそうろう。九重なる　御代の一ぢ。せい〳〵どう。さそうろう〳〵や。

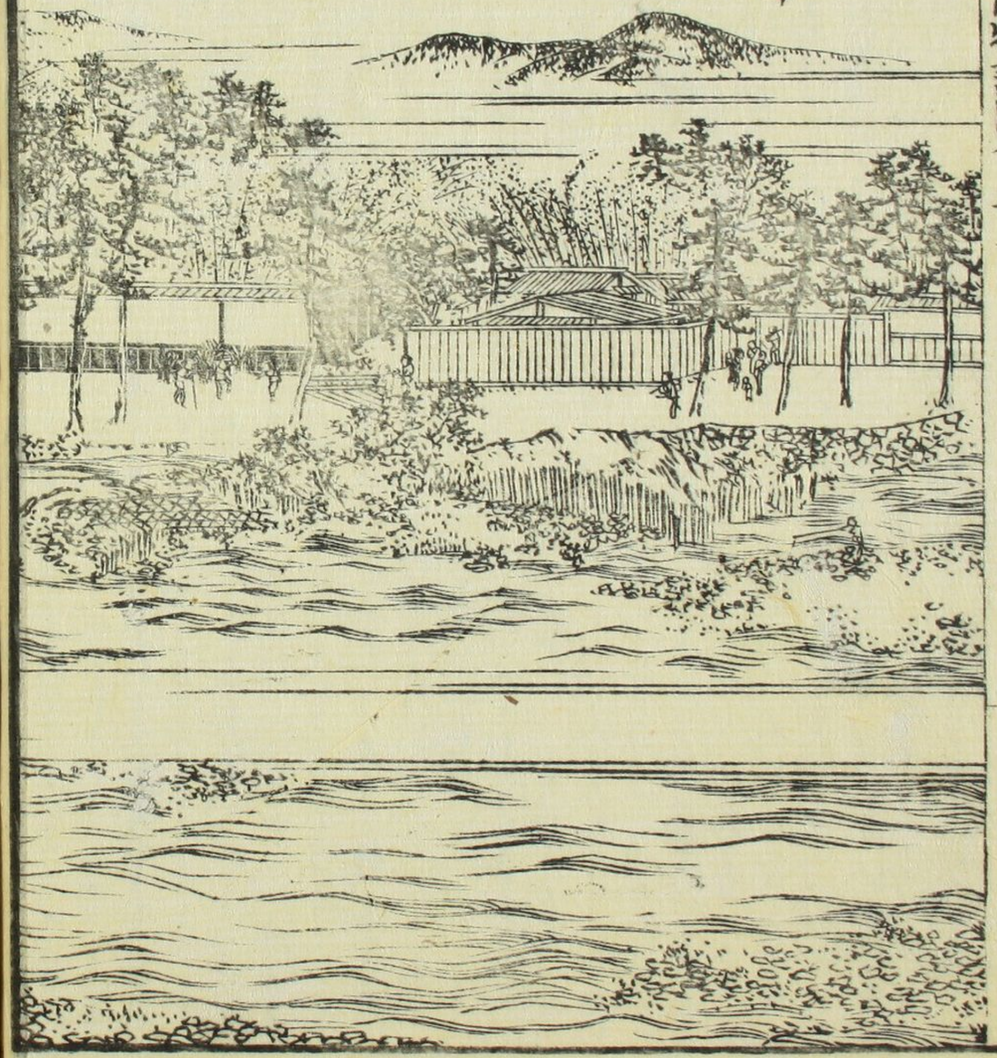
よしこう。西宮。玉そー。波のひくり安。まくおのくぐる。
日でりの年は茶の木の葉
うまこうびんがのちゑさ
むくへうくむてう

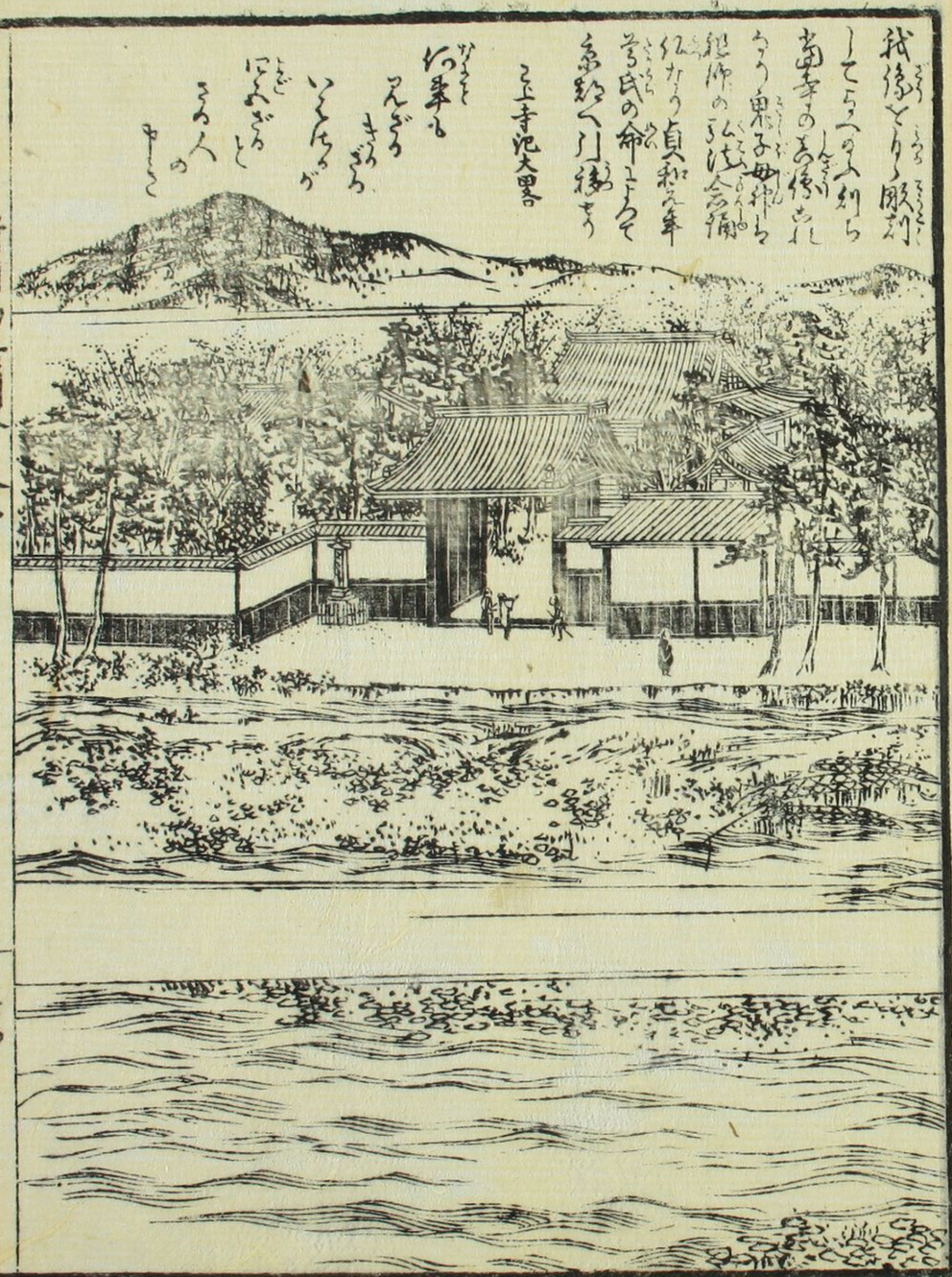
あまさでなうとのひゑ
とそかんを一枚てまち和尚さまへ
やくくおまち。一休きのこ
もかく。一云のれといつぐ
かく枚まくうろを庵
へまいりてむくりまして
くのひくさを通半
○又さる人一休和尚くぐ
和尚きうひ。安さ半
つ和をあんで出るへ

あつさをちんくうの西胖なくぐ。栗するみ乃ぐず。そまち
うくそやれあるべく。ゑ和いまびくう
かうい作りわなまぐ。かく
うくうなくく。やく
西胖とやい高あり
大くとやなど。かくを
まくず。くそちさのう
ちさごろく。又あくのなうと
くこう結さものれ。ちんく
糸なるものそはうる和
とそ出うろ門のかうう
今もへうんがうのく
と合点くゐそや。そ
いまづ有とやいう高し

洛東砂川 猿寺

猿寺は性空上人の草創なり。祖師像、釈迦念仏の名称の山中に弘法大師の彫刻し給ふ。数多の猿群集して晨夕と唯哭して、仏法の霊験のあらたなる祖師をふるひを生じ、一宇を立て猿堂山と称す。文永年中、日朝上人参詣ありて、祖師を礼拝し給ふ。





我後とり跡刻してうつの人刻ち南寺のあるべきうう果子如来祖師のうたふ念仏仏ながう貞和二年弓馬の命ようそ多勢くり後ち

三十寺泡大雲

仏事も
えんぐる
まぐろ
いくらが
にぎやぐと
ろる人の
やうこと

もゆくの花嫩芽ことやくめづらかに周果ぞうしむうらの四今の計
ばらの事と推しかふむ
教せ我ことく大都門のごとく
まつくうらうまをぞ。ものゝ命をとうを郁ふつまーめうひーなう教
生ふはなをてくまぐくうまをあるなどふ。こゝ在のむらひやうこをほごさ
くうくうてゆせまぜう。おうぐぐ錄うかゝ事どうぐでいうみく
ふくうくうぐぐぐぐ人。先一こく

○

武者の門乃破風と掾とこの仮う称う。一つのあるとをそ
風をうとうぐぐ。一つのうのあるとをそ。今二つの称
うぐぐ。あうとこゝ人づまうとをそ。むつ門あふうちまうとをえ
あと。おうぐぐ一体をまうとをそ通うひく。ちうさとうぐぐ。
うちうぐうづき矣てるりき人。こ人のうち一人がやーやう
称もこの掾乃いうまと。ぐぐなんぐぐまでも称う合
点のぞ。只今うまふまづぐぐあうぐぐいうぐぐ人出家乃。
うちうぐうづきそ通うぐぐまーへうまて合点ーまぐぐめ。
いうをまあをうぐ称うんと。返事ぐぐ一体の社をいうぐ人。

おうぐう称ゃうん只人うぐ乃あるう掾をいうんありてうち
ううつきうぐまーまぐうぐうぐ。宝あるくいうぐぐ称うぐぐ
ありうぐうものとうぐんなる。かゝやうぐ小市我くい西方文言ま
して。称の希へもぐんせ廿さう者なり。あ和をこうう
使せうまへや前へうぐうぐうも仕うんぐうふくくし
河うまぐ。一体さうぐいうてうぐ掾のうまう。我多しうぐ
くんぐんぐどとうぐぐ称うぐぐまーまぐくのうさ前の称の
うまーまぐ。まうあとぐいうもいうぐ。称乃ひーまもあうぐげま
称の事もえうぐうまうざるい

とうんぐせうまへいこえ人の者よも。さうくむなる山鉄の
まうろうる。そうもめんくうぐうぐうぐうぐうぐうぐ
きくそのの掾いれ体のうぐうぐうぐうぐうぐうぐ
うちぐりうぐが二人のやーぐうぐうぐうぐうぐうぐ

りつく。二人とりふ今日ようてをとろ屋し。ばりあつもとはじて。ねることつふふ五ようまが。わるてし妻を寺の後ろ待つ今ふかそそろう人約くおくおりしい出く

今日のりといのらせ思ふ気

あすりやきうんへねのう弘

とうそそ敗をうそ吹くうそ妻ふ。そそろの私こそもる人のいひくいふまう妻のほさるの私しうくなりめばまの事のかうそまくさそくおそ矢あざそるとうへこんごの私立ろう人のつろいかそもくくいかを世のをあくやもふそうそ。二人のもむうあうそまき事ふしとうあうそ一緒和尚へまう矢ろう和尚はそのをえくそびそ。そ分いなんそんもの

○

抱そふ格ふかんうんせうそまそ中ふうもかんうん仕の事。錦多ちなう我行のかまいもなくありうとさ。いくぶうそのすうをこそさうみいを。おし抜くかんうん仕いそ。私こそ祝ろ砂そまいうそうとくしもかすそきをのぶとのぶいそ。それみうる国まえその我おうみそきをむそくこそろきとおりくいち我なうとおくいうそ。いそうぶふをみそきをそうぶふをみそきをほけ私べくそ是行のそぶとなん人の風へみそきをそうきうみう馬庵とのい。せそくそのうあぶ。ひそて私せいそうだったぶ此人とそまう擢そく

もしいやしき人高位の人乃法をかりてもおそましにお
がり。夫婦のかたらひ事をもなし。あるひハ妾をとり。の
らうぜきを催ハりしりさまおりんハ。猿も畜を
まうきのごとくなれバおのれに対するときハ人倫乃
なみすさけのをおるぞ。懺悔のあろへをはくもなく
てしれいてありん

因果應報經にみるに。とかうとりきかさん。前生の國と
と殺せば現生の果をうく。殺生の果をうけて因縁の
國をもとめる事にあり。因果とハ過去の果をうく。
大集經の中に十悪といふ事あり。其中に命もおきこの
慈悲の中より殺生の因なきものハ。殺生の中より成る
未来にまうて殺す。その心のなき事ハうけるものの
悪業によつて因果なしとて。報ふ時おのれにかへる
人をなげく。がれなくてもおかるこのをさうし。
殺人の事なきをいふ人へ。多年に殺さかるにも
あらくいへ。殺生のまつりをなけきとも人を殺しうらむの
ことなし。作の報もうてく。其報をおのれへ

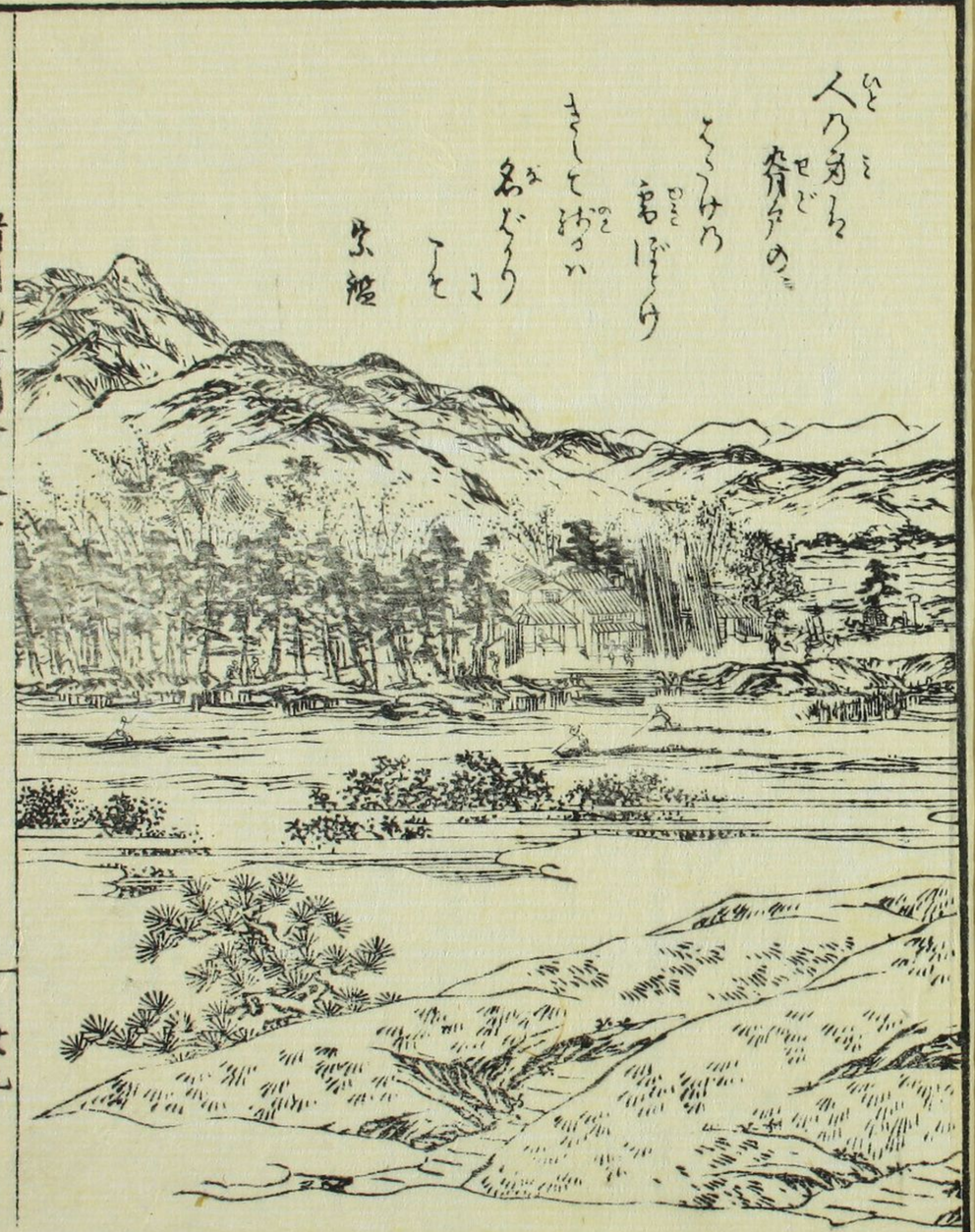
織うる網く虫を殺す殺生とあるハ仏法にハ一切衆生も慈悲の
衆生ともに候ふ。そまでひろう事なし。梵網經にとく、
一切衆生ハ皆是過去の父母親ぞく兄弟とおもふべし
うまれかはりて各おの縁をむすび。六道のあひだ生々世々
生をかへ死をかへ。ある時ハ父となり母となり。妻となり弟
となり。ある時ハ子となり。孫となる。夫となり妻となり。主と
なる。仲道となり。ひるがへりてハ畜生となり行かひて女となり
おのれのつらきおもひをなしておもひてなさけなうして。わ
まさしく子となりしる人とかうて其身となりて殺し
又ハ慈悲なくして殺生をせばしる。殺ひのうまれかはりの
からしこと。その身の國をわすれてつかうそのうらみを人に
うまれかはりしやう。殺のしる國縁によりて殺をうなり
さるやう。其くも志しずかしの報殺に目をまねてハ人を
らうしはんさきて。又をまで殺をうるおもひも切もおそきろう
あのまゝ未来まで其きき事。おろかいの縁にしくべし人を殺ろう
おもまてうまうる事ハ皆おそぶきん。殺を現世にて縁を結ぶの
せおそろくさるいかにも慈悲のまうしく。かくのごとくおもふべし。
未来の事ハ法經にいてらく目前にその法をしらく。
をしく地獄ぐさたへ生まるまゝにかくのごとく中にむまれ二に種の
果報ハ二つにわかれ。命ハ二つにあり。人加經にハ大殺生のものへ
餓鬼地獄の苦を受く。因果經にハ切るものの死して刀

○

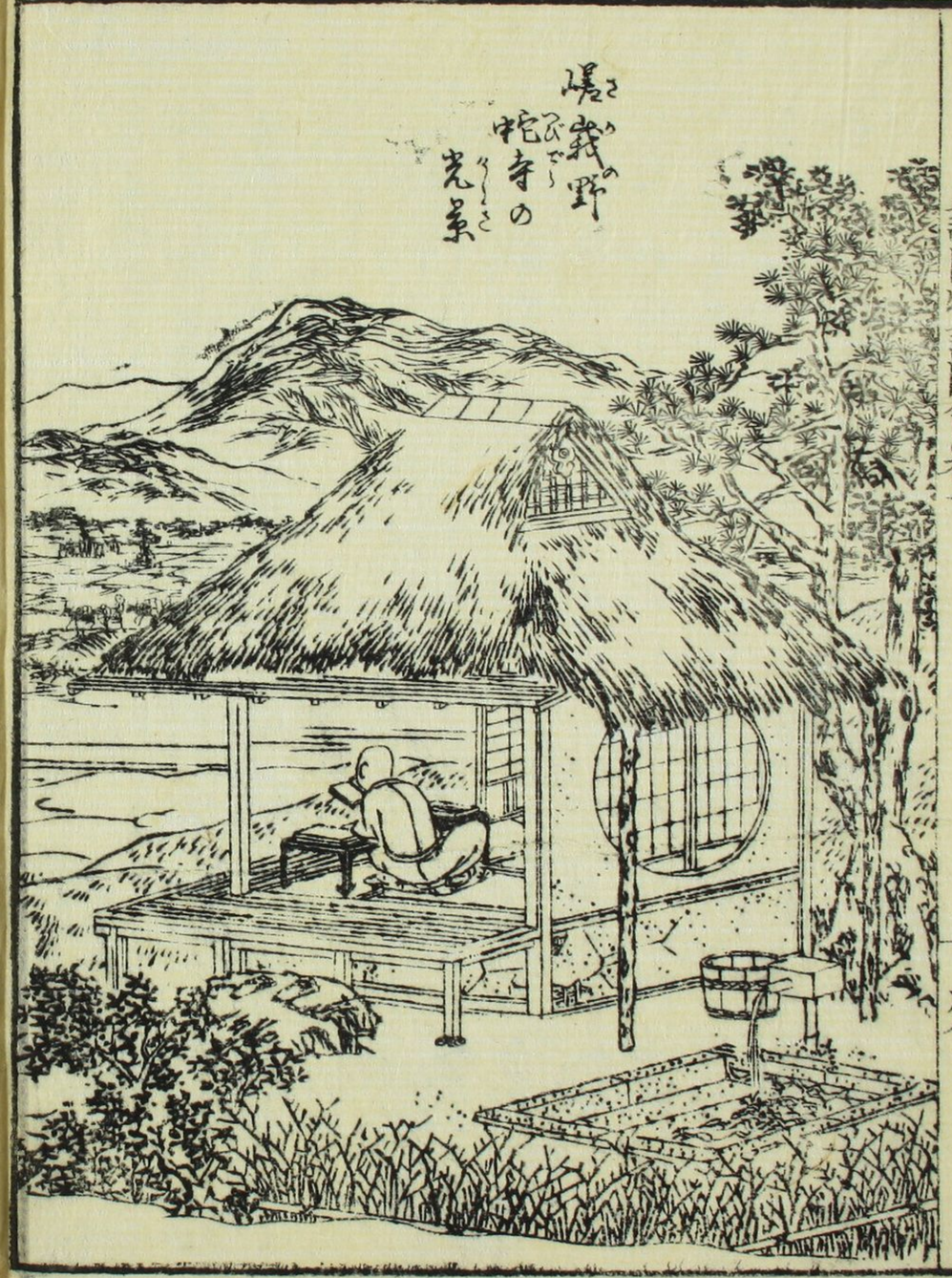
中納言安倍十二之頃の事女の子ありて居りける俄に
ひまをとりて入りける家へ一休參りかゝりあまたの人が
にげ入ぐうなる地ごくの有さまをかたりて聞せ女とうり
ありく。そもごくの色くと仏ごくのまでをおもてにあらはし
らまといが。なかなかやくん頭のまでをおもてにあらはし
ふぜいそ。おそろしくよりもかなしくなりて一休ふところ
なりとものくる一紙ふところより出しふたりの人
ふところへ入ると。髪の元結をきりきえうせ
ゆひつゝりうる。そふちをそうぎそうしと
約為あるときかの帝よ

○

叡山に一休一大事因縁のつゐでなくしてきゝ法具的
ありひらかんと達磨毎日ともしひをかゝげしてそ名てかんの花あるべくして。一ろん人
うろうろまでる。かまくらにおくふかいろんの禅中
の如きまゝそ。ぜん人こうろうなくおくふかいろんの禅中
約まじ。ぜんの出髪なりくと志ひて。ぜんをうけてそ出ぜん
よりくなりまでる。是的と先ゝくぜんの名をうけてそ出ぜん
そうろうまでる。是的と先ゝくぜんの名をうけてそ出ぜん
まおくせ。ぜんくうろういうまでる。是的と先ゝくぜんの名をうけてそ出ぜん
いうもよし。不禽なるぜんの名をうけてそ出ぜん
ぜんおもの名をうけてそ出ぜん
熟の病よりの事一なまじやうや悪なぐ
となくまでくうろひのつ事一りやあんとぜふ



人の名も
さだかならぬ
むかしの
そのかみの
名ぞのこれる
木蔭



隅田の我の野
牡鹿寺の
光景

やうるが。いや〳〵人多く
来ゝやわ〳〵ん。ひそふふ
ゑ〳〵そゝうひわ〳〵ん。誰と名ざ〳〵あるべし。あゝうが
推人ぞも。あまり。け者どもがかゝうべ。なゝうかもんとゝげ
らるゝ事のあるべうずと。軈而〳〵云合せ〳〵しそうふ
こ人とありうう。一体出あひ写る方山のおうう十そ。一人
や出なうのいぢるゝ事ぐ〳〵のゆ。徐治ことゝ出縁ゝ常り
かゝうずと主師とのゝ〳〵ゆ〳〵なり。平生うからぐひ〳〵約そ
ん深〳〵こゝゝせまうぞや。うゝ
約るいひぐ用う。そのまゝふ仰〳〵まよがうへて来〳〵ひんと
うゝうけ〳〵ゆくる。了体いうゝもうゝ〳〵けうゝ
けまゝる約ゝうがうべこと。けりれ西こびゝ。そうくのめ
中門まゝそ〳〵いなう。約ふ仰出さゝうゝ約ゝゝん
銭ならうれ合の事うそ約まとも。各いかゝのよう〳〵

なまぞひくふゆはうゝかうべうゝ系ううふ
ゆうぞゝそうやそまゝとゝ名をが句ゝはうべ〳〵一年
うそまゝすべ〳〵。ゆ約ゝ〳〵ものゝ〳〵ゆ〳〵ゆ覚
〳〵いそれうへゝまゆうゝ我るがゝ約ふうゝ〳〵。
おのゝ〳〵方へかまゆうんゝそおゝるる
へんと入一年さゝうゝ約ゝ〳〵むすび。約こ人ゝうゝ
うゝこ人ゝうゝまびゆ仰ゝせゝて。川約へうゝゝて
出ゝく。抱ゆ約ゝやさゆ事ハしゝそ。約安ひゝきそこんまゝ
本家の面目場がうゝ〳〵ずゝ
ひゝう同ゝうゝ
我のゝう天西も達ゝもあゝんも
この君田名ゝ分をやり〳〵ゝう
とかゝまうゝこ人のゝものぐ〳〵あゝまゝして。撲ゝまゝと

日ひのいんとまつめ給ふ。あるじ
久きうまでふたなくうまれ
給ふ有うるときの情うれ
多くなどわづらの天ぢやう
落給ふ姿ふうの名あうる。その比ようう育
帋まうめ給ふくうみまで。さまく
うるぜんの事をなして漸と
一体ありくうふ。かの坊のやうを
くうくうかうまで。一緒まいそまの女の
ちうじやく給ひしが。ほうそうもふ
くうまのくうまでとあつ

うまふ不動坂より。彼地うせくなりうえ
ぐさま事ふやひ。うち井山三年も住しが。そのほ
地の事もおうそれうまでくうまふ。又さざ
うつまし。二三月六のの
ふ彼の地まひ給うしふ。又夜の月
めでもうぐまふ給ひうえ山ふ住うべ法
あつ事一定業の花ふ散うり
しあと地寺とをうふやうまで今ふ坊さのすま

依法國初代図書之一章